

目せずして、萬金をば其學問の爲めなり其事業なりに投ずる眞情を思ふならば、寄附者を遇するの道として決して過ぎたりとは云へないと思はれる。特に此事は目前の利益を些の目標とせざる天文學に於て強調し得ると思ふ。若し寄附者の眞情にして不純なりと看破するならば其時こそ遠慮なく寄附金を投げ返してやればよいであらう。寄附者には飽くまで謙讓で禮儀正しくありたい。しかし諂諛的で卑劣ではありたくない。(つづく)

通俗天文いろは歌

西岡 芳涯

- 一 い 一等星 皆で十九 あるなれど
我等が見るは 十五なりけり
二 同 引力で 海王星の ありどころ
豫報せし人 英のアダムス
三 同 一年は 三百六十 五日と
五時四十八分 四十六秒
四 同 一月の 三日前後の 太陽と
地球の距離は 最近と知れ
五 ろ ローランド 格子で 太陽の
基準スペクトル 確と定めぬ

- 六 は 白鳥が 天の川面に およけるを
ながむる星は 織女牽牛
七 同 白羊の 第一點は 春分點
ベガス星の 左下方ぞ
八 に 肉眼に うつる 星數 五千ほぞ
同時見ゆるは 二千そこく
九 同 二十八の 星座を月の 宿場とぞ
選びし人は 印度國民
一〇 同 二十九 五三日で お月様
地球をまはる 陰曆の月
二 は 星の數 寫眞に撮りて 數ふとも
二十億には 及ばざるべし
三 同 北極の 指す方向は 移り行き
二萬餘年で 天を一周
四 同 北斗の 頭の星と 女帝星
中央にひかる 星は北極
五 同 北斗星 第六番は 二重星
ミザル主星で 従はアルコル
六 へ ヘルムホルツ 太陽熱の 本源は
其收縮に ありと説きけり
七 同 太陽系の 進む向點
ベガス星や アンドロ、カシオ、ケフィアス
八 同 土星には 衛星十箇 環一つ
主體の徑は 地徑九倍ぞ

- 元 同 斗牛間 月が徘徊ふこ ものせるを
北斗牽牛ミ 説くは誤謬
- 二 ち チホブラエ 火星研究 二十年
これぞケプレル 三則の源
- 三 同 地球軌道 楕圓なれども 離心率
ちいさく六十 分の一なり
- 三 二 龍座なる γの星で ブラッドレー
光に行差 あるを發見
- 三 同 流星は 小天體ミ 空氣ミの
まさつて起る 強き光ぞ
- 四 同 龍座なる αの星は ビラミット
建ちにし頃の 北極の星
- 五 ぬ ぬば玉の くらき大空 青きわけ
微塵が光 反射するなり
- 六 る ルムメル氏 木星の月 觀測し
光の速度 推し測りけり
- 七 を 乙女ミは 夏の夕空 南西に
青白く光る 一等の星
- 六 わ 輪にならぶ 北冠の星 そのかみは
アリアドネ姫の 首かざりぞ
- 元 か カシオペヤ 椅子にかたさる 五つ星
川の流に W字留めぬ
- 三 同 カノプスは 壽老人なる 福の神
光りもつよく シリアスにつぐ
- 三 よ 夜の明けミ 日暮れの境 さだむるは
一等星の 光りあるなし

- 三 た 太陽の 徑は地球の 百九倍
熱度は攝氏 六千を起ゆ
- 三 同 太陽ミ 地球の距離の 平均は
三千八百 萬里あるなり
- 四 た 大角は 北斗の尾さき 遙なる
空にかゝやく 赤き恒星
- 五 れ 聯星は 角距離三十秒 以内にて
相互引力 及ぶ兩星
- 六 そ 存在の 知れぬ小さき 遊星も
寫眞に撮りて 既に一千
- 七 つ 月までの 平均距離は 地半徑
六十倍で 九萬八千里
- 八 同 月の面 玉兎桂下の 餅搗きは
窪地の光り 弱き所ぞ
- 九 同 月かけは 見る人により 異なれミ
目より一尺 さきの九厘
- 四 ね 年視差は 地球軌道の 兩端で
星をながめし 角の差の半
- 四 な ながくミ 長き尾を 曳く 彗星
天津はこりの 飛べる一團
- 四 ら ラングレー 微温計をば 發明し
一億分の 一度まで知る
- 四 む 無始無終 無限無邊の 宇宙をば
一貫するは 因縁ミ果ぞ
- 四 う 牽牛は 一等星の 標準で
これぞ鷲座の α星なり

望 る 隕石は 皆流星の 燃え残り
 冥 の 野や海の 夜の 大空 ながむれば
 如何に 莊嚴 雄大の 景
 四 お オリオン の 三ツ星 下に たなびきて
 うすく 光れる 氣狀星雲
 冥 く 火星色 燃ゆる如 又脚はやし
 傳令二人 持てる 軍神
 咒 同 火星には フォボス、ダイモス 月二つ
 フォボスは 西に出 東にぞ入る
 吾 や 山羊座なる $\alpha\beta$ は 宿星の
 牛にあたるこ 知ろしめされよ
 五 ま まばたきを せはしくするは 恒星ぞ
 光りつよくて せぬは 遊星
 至 同 満月を ながめて人の 眼をひくは
 チホに ケブレル コペルニカスぞ
 至 け ケンタウル α はいこも 近かけれど
 尙四光年 三の 遠距離
 酉 同 ケフィアス カシオペヤの 舉けし娘の
 アンドロメダは ペルセアスの 妻
 至 ふ 冬空は 昂牡牛に 馭者 雙兒
 大犬小犬 參等輝る
 冥 同 雙子座の 弟の 光り 強けれど
 友愛の情 孰れ劣らじ
 至 同 佛教の 三千大千 世界は
 十億國土を 指して云ふなり

天 こ 恒星の 組成運動を 定むるは
 分光術に まさる 法なし
 五 同 琴座なる ヴェガの 側なる 四等星
 ニツ諸共 四重星なり
 六 え エロスなる 小遊星を 利用して
 地球太陽の 距離を 定めぬ
 六 て 天王星 四ツの 衛星 伴ひて
 八十四年 太陽一周
 三 あ アンドロメダ 第二の星の 上方に
 かすかに 光る 螺旋星雲
 三 同 天の川 其源は 知らねども
 白き流は 星の 群なり
 六 同 畢星は ハイヤデスこも 唱ふなり
 牡牛 α の 入れる 星團
 空 さ 蝎座の 心は 赤く かかやきて
 夏の 夕空 かざる 一等星
 六 き 金星は 宵に 夜明の 明星で
 晝又たまに 見ゆる 事あり
 空 ゆ 遊星は 水・金・地球 火・木・土に
 天王海王の ハツぞ 主なる
 六 め めあてなき 大海原を 行く舟は
 日月星を たよる 外なし
 六 み ミラ(驚異の意)星は 鯨座に あり
 二等より 變ふ 八九等まで
 光度を ば
 七 同 眉間に ぞ 二等星を ば いたゞける
 蛇遺ひ座は 夏の ながめぞ

七 同	三ツ星の ある星座こそ オリオンぞ
支那で 參宿 和名參	
七 同	み空なる 星の日毎に まひかへる
事より知らる 地球自轉を	
七 し	天狼は 又大犬ミ 稱へられ
恒星中で 光輝第一	
七 同	四、十月 三日の頃の 太陽ミ
地球の位置は 平均の距離	
七 同	七月の 五日の頃に 行く地球
遠日點を 通過するなり	
七 五	エルダン河・參星の 左足より
うねり流れて 水委まで	
七 ひ	東より 西する如く 見ゆる月は
眞西より 東行くなり	
七 も	木星は 衛星九個 横條あり
地球の徑の 十ミ一倍	
七 せ	星座數 幾つあるかミ 言問はミ
主なるものは 約を九十	
七 す	昂星 七ツ星ミも 稱ふれミ
星數は視力ミ 共に増減	
七 同	スフィンクス 乙女のかしら 獅身像
冬至の日の出 千古眺めぬ	

大正十一年十月十五日誕生記念

天文數へ歌 同上氏

一ツトヤ 東に昇る、日の丸の、周曲は地球の、百九倍、
光が一秒、かけ行かば、地球を七度、半まはる、
同 不思議に満ちたる、大空を、眺めよ感ぜん、大威力、
二ツトヤ 満つれば虧くる、月の距離、地球の六十倍、九萬八千里、
三ツトヤ 宵の夜明の、明星は、二等星、遠に光るは、天狼星、
同 宵の夜明の、明星は、二等星、遠に光るは、天狼星、
四ツトヤ 夜畫同じば、彼岸頃、彼岸の中日は、皇靈祭、
同 五車星の右の方、二子星の、左の趾先夏至點よ、
五ツトヤ 引力則で海王星の、ある事の、豫報者は英人、アダムス氏、
六ツトヤ 無數の星辰、群りて、白く流る、天の川、
七ツトヤ 長き尾を曳く、彗星、天界の埃塵の、一團、
八ツトヤ 八つの遊星は、水、金、地球、火、木、土に天王、海王星、
附 八つの遊星は、水、金、地球、火、木、土に天王、海王星、
九ツトヤ 光線を分析して、天體の、組成と運動を、推定す、
十ツトヤ 遠きな數理で、推し測り、宇宙を究むる、天文學、
十一トヤ 一番近き、恒星も、凡そ四光年、三の距離、
同 一年は三百、六十五日、五時四十八分、四十六秒、
十二トヤ 肉眼に映つる星、六千許、同時に見得るは、其半、
同 日光を新月が、遮りて、太陽の虧くるが、月蝕、
同 日光を地球が、遮りて、満月の虧くるが、月蝕、
十三トヤ 三千八百餘萬里は、天文單位、之れぞ太陽と地球の距離、
十四トヤ 天狼星は青白く、輝きて、恒星中一番、よく光る、
十五トヤ 恒河沙の星辰を寫眞に撮りて、算ふと二十億を越ゆるなし、
十六トヤ 六萬燭光の電燈を、一米の、高さで點燈さば、日光と同じ、
十七トヤ 七星の頭と、女帝星の、中央に光るは、北極星、
十八トヤ 白鳥座をへだてて、一等星の、織女と牽牛が、輝り、
十九トヤ 空氣さ小天體が、摩擦して、光を放つが、流星ぞ、
二十トヤ 二十九點の、五三日で、お月様が地球を、一週する、
事項なり 以上は其の、%までは尋常及高等小學校の教科書より採録したる